

ADHD、PTSD、うつ病

宮岡 等

「部屋を全然片づけられない。自分はADHD（注意欠陥多動性障害）ではないか」と精神科外来を受診する成人が増えた。一般向けの本を手に「ADHDは脳の病気。自分の片づけられない傾向はその結果であるが、薬で治る可能性もあるらしい。診断がつけば家族にも説明できる」と言う。「会社で上司の厳しい注意を受けてからいろいろな症状が出た。自分はPTSD（外傷後ストレス障害）ではないか」と訴える人が、「自分の症状は厳しくされたことのやむをえない結果だから、PTSDという診断がつけば会社にも家族にも理解してもらえろ」と述べることもある。しかし「会社での注意」がPTSDと診断されるほどに外傷的と判断されることは少ない。

脳の病気や外傷的な環境のように自分ではどうにもできない要因によって、精神症状や行動上の問題が起こったと考える傾向が気になる。このような考え方は本人には受け容れやすいかもしれないが、こころの問題の解決には多かれ少なかれ自分の内面を省みて、みずから環境に働きかける努力が不可欠であろう。

十数年前まで精神療法が主、薬物療法が従と考えられていた抑うつ神経症の一部は、今日、「うつ病は脳の中の神経伝達物質の異常であり、薬で治る」という言葉のもと、薬で治療する脳の病気に変わった。これも自分ではコントロールできない要因重視であろう。ADHDやPTSDの多くは診断の段階に止まっていたが、うつ病では抗うつ薬による治療まで実際に行われるから事態は深刻である。「おまえも精神科医だろう」と言われるのを覚悟のうえで、精神医学は診断基準の科学性、社会への説明に、薬の売り上げを伸ばそうとする製薬メーカーの思惑まで加わるなか、みずからを振り返り、問題解決に向かう努力を続けているのであろうか。

